

近代化の急速に進む中国東北部

ERINA調査研究部研究員 尾暮克文

2003年11月2日(日)から12日(水)までの11日間、新潟市からの受託調査「新潟・中国ビジネスモデル創出事業」のための現地調査、及び2月2日(月)、3日(火)に朱鷺メッセで開催された「北東アジア・ビジネスメッセ」への出展依頼のため、中国の東北三省(黒龍江省・吉林省・遼寧省)と内モンゴル自治区を訪問した。私にとって中国訪問は初めての経験だったため、中国訪問における初心者の方の目線で現地訪問の概要を報告する。

なお、同事業の現地調査は、新潟市企業と中国国内の大学との産学連携の可能性を探るため、現地の地方政府担当機関、社会科学院(シンクタンク)、大学へのヒアリングの実施を内容としていた。

訪問ルートは、ハルビン～長春～大連～瀋陽～北京～フフホト～北京～ハルビンで、都市間の移動は飛行機と列車を利用した。

ハルビン

11月2日(日)の新潟空港出国ゲート付近は、「新潟県・黒龍江省友好県提携20周年記念事業」として平山新潟県知事をはじめとする訪問団が出発するため、その関係者及び報道関係者で大変混雑していた。

新潟を飛び立ち約2時間半、現地時間の午後3時半(日本時間午後4時半)に曇り空のハルビンに到着した。秋晴れの新潟から一転し、飛行機から降りると予想以上の冷え込みが待っていた。高速道路や一般道を通って市街地まで向かう途中、何回かロバ車を見掛けた。今でも輸送手段としてロバ車を利用している話は聞いていたが、実際に見ると何とも言えない驚きの光景だった。

夕方から黒龍江省社会科学院を訪問して産学連携の可能

性についてヒアリングを行った。省内の現状は、ハルビン工業大学など高い技術力と研究基盤を持つ大学が存在しており、1990年代以降は国内レベルの産学連携が盛んになった。現在では、省政府が省内から多くの参加者を集めて産学連携見本市を開催している。しかし、産学連携を促進する優遇政策がないことや、マッチング機構（仲介役）の不足などの課題も挙げられた。省内の主な大学の概要の説明を受けた後、意見交換を行ったが、「産学連携」は非常に興味深く国際的ネットワークの構築に資するテーマであり、国際的連携の成功事例を実現させたいとの意見で一致した。

翌3日(月)の午前中は、新潟県訪問団の視察に合流してハルビン市経済開発区内に建設中の「ハルビン国際展覧スポーツセンター（写真1）」を視察した。同センターは、2,000ブースが設置可能な展示場（建築面積約36,000㎡）、1,800人規模の会議が開催可能で、35の会議室を備える国際会議場、38階建て600以上の客室を有するホテル、1万人収容の体育館や5万人収容の競技場、そして、大規模ショッピングモール等で構成されている。現在、ホテルや国際会議場等は建設中であるが、完成予定は2004年6月とのことだった。それらの周辺には、金融機関、高級マンション、公園が配置される計画である。このプロジェクトが黒龍江省、ハルビン市及びハルビン工業大学グループの共同出資によるものであることには非常に驚かされた。



写真1 ハルビン国際展覧スポーツセンター

午後は、黒龍江大学の産学連携の窓口である「科学技術処」と黒龍江省科学技術庁を訪問した。黒龍江大学の科学技術処では、大学の概況、産学連携の経験や可能性等の説明を受けた。同大学では、国内の産学連携の例は多数あるが、国際的な連携例は今のところ少ないという状況だった。しかし、日本企業との連携実績を持っており、IT分野や新材料・新素材分野などにおいて国際的な連携に前向きな姿勢が感じられた。

黒龍江省科学技術庁では、産学連携に関する中国国内全体や省内の概況、省政府の支援策等の説明を受けた。主な支援策として、大学と企業に対する財政的支援、産学連携の集中地域「ハイテク開発区」の整備や連携の成果を産業化するための仲介機能を有する「科学技術成果転化センター」の設置を行っているとのことだった。

全体スケジュールの関係で11日(火)に、再びハルビンに入り黒龍江省対外貿易経済合作庁を訪問して、「北東アジア・ビジネスメッセ」への出展依頼及び情報交換を行った。懸案事項もあったのだが、面会できたことによって担当者の誠実な対応に勇気付けられた。

ハルビン市を初めて訪れ、中心部は予想以上に都会的な街だと感じた。10車線程の道路沿いには近代的な新しい高層マンションが既に立ち並んでいたが、街のあちらこちらでビルやマンションの建築現場を目にした。そして、ロシアの雰囲気が高く残りハルビンを代表する歴史的な通り「中央大街」は大勢の買い物客などで賑わっていた。

長春

3日(月)の午後5時過ぎにハルビン駅から特急列車で長春を目指した。日は既に落ち列車の窓から果てしなく続く平原を眺めていると2時間半後には長春に到着した。

翌日4日(火)の午前は、吉林省社会科学院で訪問調査を行った。省内の調査対象となった吉林大学、東北師範大学、延辺大学、長春理工大学の概要や産学連携の現状について説明を受けた。それぞれは研究レベルが高く特徴のある総合大学であり、今後の発展可能性も見込めるし、研究開発能力がある。研究成果の製品化に多くの成功例を出しているとのことだった。

午後訪問した吉林省科学技術庁では省内の状況説明を受けた。説明によると、産学連携を推進しているが、省内の大学は計画経済期に設立したものが多く、1988年以来、市場経済に適応する段階にあり、そのための措置として、国からの研究費を削減するなどしてできるだけ自力で運営していけるように誘導している状況である。このことが、中国の大学が産学連携に対して否応無しに熱心に取り組みざるを得ない状況を作り出している。

次に、吉林大学科学技術パークを訪問した。同パークは長春ハイテク産業開発区にあり、総面積26.2haの広大な敷地を有している。2000年8月に設立準備委員会を立ち上げ、現在は一部完成しているが、2006年に全て完成する予定である。大学の研究成果を産業化、商品化する有効な方法の1つが科学技術パークの建設であり、大学の現状を踏まえた技術の産業化、商品化の基地、インキュベーターの役割

を果たしていた。

夕方、吉林省対外貿易経済合作庁を訪問し、省政府幹部に対して「北東アジア・ビジネスメッセ」への出展依頼及び情報交換を行った。その結果、ERINAとの関係を重視しており最大限協力するという確約をもらうことができた。

長春には、日本と中国との歴史を物語る日本式建築物が点在し、それらはいまだに政府機関などとして利用されている。暮盤の目のように整備された道路や緑が多く美しい町並みを見ていると日本にいるような錯覚を起した。

大連

11月5日(水)の午前8時半に長春空港を出発し、わずか50分で大連空港に到着した。空港に降りると非常に暖かく感じた。それは長春と10度ぐらいの気温差があったためである。午前10時過ぎにもかかわらずホテルにチェックインができた。前の宿泊客がチェックアウトして準備が整っていたら、いつでもチェックインが可能という柔軟な対応は中国では当たり前のものであった。

現地運転手が道に迷うトラブルに見舞われ、予定より遅れて大連理工大学に到着した。科学技術処から同大学の概況、研究成果の産業化・商品化の状況などについて詳しい説明を受けた。同大学では、独自の投資有限公司を設立する方式が技術産業化のモデルケースとなっていた。同大学が会社設立の際に、資金や技術を提供することで金額評価されて株式を持つことになる。中国の会社法では、一般技術の評価金額は資本金の20%まで、ハイテク技術は35%までと規定されているとのことだった。同大学は、日本に近い地理的な優位性や日本企業との合弁企業を設立した経験もあることから、日本企業と連携を持つことに積極的である。

大連の中心地「中山広場」近くのホテルに宿泊したが、部屋からは超近代的な街並みを眺めることができた。実際に大連駅前を散策した時には、デパートや高層ビルに囲まれた通りの華やかさに驚嘆しきりだった(写真2)。

瀋陽

11月6日(木)の午前8時に瀋陽へ向かうため特急に乗り大連駅を出発した。途中、大石橋駅と瀋陽駅に停車して正午前に瀋陽北駅に到着した。

午後2時過ぎから遼寧社会科学院でヒアリングを行った。省内の産学連携の概況、省政府の取り組みなどの説明を受け、次に中国医科大学へ向かった。

副校長の説明によると同大学は国内でも屈指の医科大学であり、歴史的な要因や中央政府教育部により「日中医学協力センター」が設置されているなど、日本の医科大学や



写真2 大連駅周辺のショッピング街

医学者となつなかりが深いとのことだった。薬の分野で日本企業と合弁会社を設立した実績も持っている。研究費を獲得するため海外の企業との連携に興味を示していた。ただし、中国市場向けには有力なパートナーとなり得るが、医療関係という特殊な分野であるがゆえに日本の薬事法等の問題を考えると日本市場向けには課題が残ると感じた。

翌日7日(金)は午前中に瀋陽農業大学と瀋陽化工学院、午後は遼寧省科学技術庁でヒアリングを行った。

瀋陽農業大学では、大学の概要や産学連携の状況の説明を受けた。同大学は温室栽培や水稲栽培、特に水稲の品種開発分野に優れており、研究成果として単位面積当たりの収穫量は日本より多いだろうと自信を持っていた。産学連携の状況は、大学が研究成果を産業化させるための企業を立ち上げるケースや企業へ技術移転を行うケースなどが中心とのことだった。

瀋陽化工学院は、化学系単科大学として設立されたが現在では総合大学化されているという副院長の説明だった。国や省から産学連携関連の賞で表彰されている同学院は、省の柱の石油化学産業の技術のレベルアップや省の経済発展にも貢献しているという。産学連携の状況については、学生の企業研修と企業のための訓練コース設置などが特徴的だったが、具体的に技術移転の成功例も挙げていた。

次に、遼寧省科学技術庁で産学連携の省内の概況や取り組みの説明を受けた。省政府としては産学連携を奨励し、東北振興策の1つと考えている。省政府はハルビン工業大学、清華大学、北京大学、上海交通大学、北京航空航天大学などの7つの著名大学等と産学連携に関する覚書を交わすなど積極的に取り組んでいる。大学教授等の研究者や大学が設立した企業、一般企業などが参加する大規模な総合的マッチング会合を年1回開催しており、2003年9月に鞍山市で開催した会合には、中国各地から85の大学・研究機関、1,500社あまりの企業が参加した。また、専門的な分野別

の会合を逐次開催しているとのことだった。

この日の瀋陽は、小雪がちらつきとても寒かった。中心部は近代的ビルやマンションの間に立体的な道路が走り、非常に大きな街だったが、郊外に出ると状況は一変していた。郊外にあった今回の訪問大学は、キャンパス内を徒歩で移動するのが困難であるほど非常に広大な敷地を確保していた。走っている自動車の窓から、ISO9001の看板を掲げた会社の横をロバ車が通っているのが見えた。この何ともアンバランスな光景が中国社会の現状を物語っているように思われた。様々な場面で物価の低さを実感したが、その一例を挙げると、訪問途中で革靴のかかとりが取れるアクシデントがあり、路上で修理を頼んだが、たったの2元（1元＝約13円）で取れたかかとりを取り付けてもらった。日本の相場では600円から800円であることを考えると物価の低さに本当に驚いた。

フフホト

7日の夜、瀋陽空港から約1時間掛けて飛行機で北京空港に到着した。北京の初雪としては記録的な雪に出迎えられた。翌日の8日(土)にフフホト市に移動した。北京を飛び立ち45分で到着したが、空港から市街地へ向かう車窓の風景に驚かされた。内モンゴルと言えば大草原を想像するが、

「西部大開発」を受け整備された街路沿いに中高層ビルが立ち並び、華やかなデパートなどが近代的な街並みを形成していた（写真3、写真4、写真5）。

内モンゴルを実感したのは、中国語とモンゴル語が併記された看板と食卓に並び羊料理を見た時だった。自動車の横を通過するおびただしい自転車が、経済成長の過渡期を象徴していた（写真6）。近年のマイカーブームで、日本やドイツメーカーなどの自動車がたくさん走っていた。中型車の相場は約10万元だが、現地の生活水準では相当高額のため、ローンの利用、親戚との共同購入などの方法で手に入れていると地元の人から聞いた。携帯電話も、欧米メーカーの進出に伴ってここ数年で急速に普及したと言う。また、宿泊した国営ホテルは19階建の立派な建物でインターネット環境などのハード、ソフト共に充実していた（写真7）。

10日(月)に内モンゴル自治区商務庁を訪問し、自治区政府幹部に対し「北東アジア・ビジネスメッセ」への出展依頼及び情報交換を行った。新潟でのメッセ参加の後、ミッション一行が韓国へ向かう予定を聞かされ投資誘致に懸ける情熱を感じた。また同幹部から、羊毛・カシミア・牛乳等の畜産品や豊富な石炭を利用したエネルギー産業などの主要産業について熱心な説明を受けた。

この後、再び北京経由でハルビンに戻り、12日(水)に新潟



写真3 ホテルからフフホト市街を望む



写真4 百貨店入口前の様子



写真5 フフホトの街角



写真6 道路に溢れる自転車

空港に到着して11日間に及んだ出張が無事終了した。



写真7 ホテルロビーに飾られたチンギスハン像



写真8 高台からフフホト市郊外を望む

終わりに

初めて中国を訪れて抱いた一番の感想は、「百聞は一見に如かず」ということわざが当てはまっている。具体的には、都市部が想像以上に発展していたと感じた。そして、真新しいビル群や建築ラッシュを目の当たりにすると、経済成長とはこういうものかと実感できた。目抜き通りには日本でも馴染みのファーストフード店が出店しているが、路地裏を見るとまだまだ発展の余地を残している。中国東北地方の潜在能力は計り知れないものであろう。

今回の出張で50枚以上名刺を交換したが、その大部分の人が情に厚く非常に仕事熱心であった。様々な問題を内包しつつも、急速な発展を遂げているのはこのような人々に支えられているからであろう。そう考えると多くの人々との出会いが何よりも大きな成果である。最後に、中国とのビジネスをお考えの方へ現地に足を運ぶことをお勧めして出張報告を終える。